

小池重喜先生、岸田孝弥先生、小川雅敏先生 定年退職にあたって

学長 木 暮 至

小池重喜先生は、昭和17年3月、山口県下関市にお生まれになり、県立下関西高を卒業され、昭和36年4月東京大学教養学部文科Ⅰ類に入学されました。そして、昭和38年4月経済学部に進学され、さらに東京大学大学院経済学研究科修士課程（理論・経済史専攻）および同博士課程へと進まれ、博士課程単位取得満期退学後、昭和49年10月、本学助手（附属産業研究所専任所員）として採用され、この平成19年3月31日をもちまして高崎経済大学経済学部をご定年になり、ご退職なされることになりました。在職年数は実に32年6ヶ月という長きに亘り、真摯な態度で研究と教育に献身的な努力を捧げてこられ、また本学の発展のために多大なるご尽力とご貢献をなされてこられました。先生、ほんとうに長い間ありがとうございました。

先生の本学採用は附属産業研究所専任所員としての勤務でありましたが、経済学部では日本経済論の講義と演習Ⅰ・Ⅱを担当されてきました。そして、平成8年4月の地域政策学部設置の設置と経済学部の再編に当たって、経済学部経営学科に所属変更となり、日本経済史、産業史、演習Ⅰ・Ⅱを担当されましたが、それまで、附属産業研究所の専任所員として産研を支えてこられたのです。先生ご着任の1974年以降、産研は専任所員を迎えてようやく長い停滞期を脱して拡充期に入ったと言えます。それは今日の産研の礎石固めが先生のご尽力によるものであることは言うまでもありません。本学の発展の基礎はまさにそこにあり、卒業生、教職員を代表して、改めて先生のご苦勞に対し感謝の念を捧げたいと思います。

先生は土地制度史学会、社会経済史学会や日露戦争研究会などに所属されておられるように、先生のご研究は群馬県産業史の研究、日本造船業史の研究、海軍火薬工業史の研究、日本産業史の研究、日本財閥史の研究などの諸分野にわたり、深くかつ多岐にわたっております。特に、群馬県産業史では、電力産業に関心を寄せられ、第一次大戦後や1930年代の群馬県電力産業の実態を明らかにするとともに、また戦時期の労働問題に関する賃金制度の再編成についても究明されております。そして、群馬県の組合製糸の器械化の局面や陸軍岩鼻

火薬製造所の設立と展開、また農山村経済厚生計画などの研究に取り組みられてこられました。日本造船業史では、昭和10年代の日本造船業の業況や第一次大戦前後の商船建造市場、日本造船業の市場構造等を明らかにされております。また、海軍火薬工業史では、海軍における火薬工場管理、第二火薬廠の設立、立地、着工、建設と排水路布設問題など大著の論文が多くあります。先生はこれらの研究課題に対してこれからも飽くなき挑戦をして研究の独自性と体系化を図ろうと燃えていらっしゃいます。

普段の先生は、言葉数は少ないが常に熟慮されており、問題を真剣に受け止めて多くの議論を正しい方向へと導いてくださいました。根っからの学究肌の先生ですので学科長、学会長、人事委員長などの要職は私たちに安心感を与えてくださいました。また、郷土資料の収集にも積極的に関わっていただき感謝に堪えません。ご退職後も特任教授として学生指導をお願いすることになりますが、どうか私たちにとっても身近な相談者としてこれからも宜しくご教示願えれば幸いです。先生の益々のご発展を心から祈念しております。

岸田孝弥先生は、昭和40年3月、日本大学理工学部経営工学科管理工学専攻をご卒業され、(財)労働科学研究所労働心理学第二研究室にお入りになり、単調労働の研究に従事されました。その後、昭和45年4月、日本大学大学院生産工学研究科管理工学専攻修士課程に進学され、さらに、同博士課程に進まれると、(財)労働科学研究所労働生理・心理学研究部員として、エネルギー代謝と体力の研究に取り組み、昭和49年には、米国マサチューセッツ大学工学部IE&OR 学科で客員講師を、また同大アジア研究科で日本語専攻学生指導員を務められました。昭和51年3月、日本大学大学院生産工学研究科の博士課程を修了されるや、同年4月、日本大学より工学博士の学位を授与されました。本学への勤務はこの昭和51年4月であり、爾来、31年間という長きに亘って研究と教育に献身的な努力を捧げてこられたのです。そして、この平成19年3月31日をもちまして高崎経済大学経済学部をご定年になり、ご退職なされることになりました。先生、長い間ほんとうにありがとうございました。

先生は、本学においては産業心理学、労務管理を、また大学院においてはマクロ・アーゴノミクス研究を中心にご講義なされましたが、また他大学の非常勤講師としては、労働生理学、安全衛生、人間工学概論、心理学、人間関係論、経営管理論、日本的経営論、産業・組織心理学など、多くの講義を担当されておりました。それは先生のご研究の広さを示すものであり、その業績は膨大なものになります。著書(単著)5冊、共著は20冊を超え、約50本にも及ぶ学術

論文のうち半数は先生ご自身の単著であります。

このように、数多くの成果を発表された先生の業績は一言で言い尽くせませんが、従業員の生理・心理機能を調査研究して、単調労働の作業行動に及ぼす影響を副次行動という新しい方法により分析できることを示し、この副次行動分析が単調労働化の過程を明らかにするのに有効であること、また産業疲労研究の手法としても有効であることを初めて明らかにするなど、人間工学研究に不可欠な多くの示唆を与えて来られました。そして、産業心理学的アプローチを中心として、労働負担、労働時間、健康、高齢化、安全等の諸問題を常に現場調査の資料をもとに論及しておられます。

特に、先生からは安全問題に対して人間工学的観点から新しいアプローチによって詳細な分析を行うなど、安全問題への並々ならぬ熱意が感じられます。こうした業績から、わが国における安全管理の研究の第一人者として高く評価され、警視庁自転車対策検討懇談会の座長を務めるなど、時々ニュースでもお姿を拝見したところでした。また、先生は生産性と組織システムの効率性に関わる技術であるマクロ・アーゴノミクスの視点から、新しい企業経営管理の学問の確立を目指されているとあってよいでしょう。

先生は多くの学会で中心的な活躍をされましたし、本学においてもたくさんの要職を担当されており、特に、附属産業研究所所長時代には、地域の交通問題や輸送問題、交通事故調査はもちろん、新産業・雇用の創出など地域貢献に献身的な努力を払われてこられたのです。

先生、長い間ほんとうにありがとうございました。先生のご苦勞に対し、深甚なる感謝を申し上げますとともに、これからのご活躍をお祈り申し上げます。

小川正敏先生は、昭和17年3月、東京都足立区梅田町にお生まれになり、都立上野高校を卒業され、横浜国立大学経済学部に進学されました。昭和40年3月同学部を卒業後、経済企画庁に入庁され、調査局統計課に配属となり、翌年には長官官房秘書課に移られて長官の秘書官付および秘書官事務取扱心得として活躍されました。その後、1年間の経済研究所国民所得部国民支出課の勤務を経て、昭和44年7月には大蔵省へ出向され、主計局通産第一係及び第三係の主任としてご活躍、その後、再び経済企画庁に戻られて、昭和46年7月～48年8月アメリカ合衆国へご出張なさいました。この二年間の間に、The Johns Hopkins University の The School of Advanced International Studies へ入学され、修士課程を修了されて Master of Arts の称号を授与されたのです。

そして、留学から戻られると、調整局産業経済課ならびに内国調査課の勤務

を経て、大蔵省東海財務局理財部の次長、部長として出向され、再び経済企画庁へ戻られ、長官官房付、総合計画局、調整局と勤務された後、外務省へ出向し、在アメリカ合衆国日本国大使館参事官を務められました。再び、経済企画庁へ戻られ、総合計画局計画官、長官官房会計課長、国民生活局審議官等の要職を歴任され、平成5年6月経済企画庁をご退官なされた後に、北海道東北開発公社に入庫され、3年間の理事を務められた後、三井海上基礎研究所に入社し、8年間、顧問として社の発展に尽力されたのです。

先生の本学への勤務は、平成16年10月からありますが、本学が大学院経済・経営研究科博士後期課程の開設にあたり、急遽、公募することになり、多くの応募者のうちからたった一人選ばれた先生であります。したがって、先生には手薄だった大学院の講義をお願いする一方で、経済学部での講義もご担当願うことになり、マクロ経済統計Ⅰ・Ⅱ、日本経済事情Ⅰ・Ⅱ、戦後世界経済論Ⅰ・Ⅱ、外書購読Ⅰ・Ⅱなどと、長い中央官庁での経験を生かしたご講義を担当願った次第です。

このような豊富な経験から、先生の業績は白書など、私たちにとっても馴染みの深いものがたくさんあり、「財政と国民所得の知識」や経済白書である昭和51年度、昭和52年度「年次経済報告」、「規制緩和の経済理論」などをはじめ、調査書も多く、経済統計関係では、「日本の経済統計」（三井海上基礎研究所）、経済事情では、経済企画庁からの委託事業としての「アジア地域への直接投資における技術移転・人材育成、裾野産業育成の問題に関する調査報告書」をはじめ、「対日直接投資増加の理由と日本経済にもたらす影響に関する調査報告書」など、また、国民生活では、「欧州の製造物責任制度について報告書」や「日本の国民生活」（MSK 基礎研究所）などがあります。

このように、先生の本学勤務は2年半という短い間でしたが、長い中央官庁の公務員生活と民間企業の勤務の経験から、大学へもたくさんのアドバイスをいただきました。先生にとっては大学での勤務は驚かれることが多かったかと思われませんが、われわれ大学人にとっても先生のお考えは貴重でもありました。先生は、これからも21世紀の世界を大きく規定しているものは何か、それを探り、歴史の中でそれを評価し、問題への対応策を真剣に考えて行かれようとしておられます。本学での勤務が先生にとってよき思い出となり、これからのご活躍の少しでもエネルギーになったら幸せです。

先生、ほんとうにありがとうございました。先生の益々のご発展を心から祈念しております。